

2022 1



# ナ イ ル

現代短歌ナイル

【今月の歌】

酒本郁也、多羅空岳  
荒牧建二、水津育子

\* \* \*

ナイルキャンパス／小村井敏子

\* \* \*

櫻井貞代歌集出版お祝い／須藤滋子

小村井敏子

竹中智代

\* \* \*

11 月号作品批評／二方久文

# NILE CAMPUS



271

「伯梅閑話」—伯梅となる—

小村井敏子（五代目神田伯梅）

人間国宝の柳家小三治師匠が亡くなつた。我が夫、六代目神田伯龍にトリ（寄席の出演順の最後）を譲つてくださつたことがあつた。そのことを二〇一二年十二月号のナイルに書いた。それがきっかけで、今まで書いてきた講談の話が切りの良いところだつたこともあり、ここで中断し、私しか書けないことを書こうと思う。

神田伯梅という名前は、四代目神田伯梅が、二〇一二年五月に亡くなつた、一龍齋貞山師であることをもつてしても、講談師でもない私が名乗つてよい名前ではない。代々、講談の大看板が名乗つてきた名前だ。六代目伯龍の仕事（司会など）のアシスタンントをすることがあり、そんなときに芸名の方がよいと、伯龍が言い出した。そのきっかけはこんなことだ。かつて、「湘南朗読会」という会があつた。その会が、神奈川県藤沢市の労働会館で会を持つた時、三人で朗読した「オツベルと象」の中の一人が私だつた。新婚の頃、仕事をしていた私は、家にいない。「声が聞きたい」と伯龍が言うので、この朗読会のオープを渡した。すると、それを聞いた伯龍が、「ほんとうの声」が出ている。伯梅に」と言いだしたのだ。上の学校へ行けという親の言つことを聞かず、尋常小学校卒業後、自分で、つてを求め、講談師になつた伯龍だ。講談の師匠、五代目神田伯龍が、「自分のネタはやるな」というのに、言つことを聞かず高座にかけ、医者に行つたことがないのが自慢で、講談の師匠格と思つていた、愛妻千代夫人が「医者に行つたら」と言つても聞かなかつたのだ。私の言つことなど聞くはずもない。伯梅と名乗ることになつた。私が伯梅を名乗ることは、本牧亭のおかみさんと三代目神田松鯉（じょうり）師には、お知らせした。人徳者で知られる現人間国宝、松鯉師からあたたかい返信があつたことを記憶している。

**小島資行**

**筆柿** · 隙

渋抜きの筆柿ひとつ齧りたればやわらかきかな道の駅にて  
蜘蛛の巣をズボンに擦り筆柿を食めばカラスが飛び立ちて行く  
クレヨンの柿色べつとり塗りたでば仕上げとなりぬこの絵葉書は  
店頭に筆柿並べて渋抜きと表示書かれているものも有り  
柿落とす手伝いをしてどつさりと枝ごと貰いし隣の柿を  
熟し柿うんだら柿とだらだら柿じゅくじゅく柿は大好きな柿  
筆柿の形良かりきまたの名を珍宝柿の由来ありけり  
道の駅 筆柿の里・幸田町 快晴のもとまつり賑わう

**小村井敏子**

**墓仕舞い** · 鎌

父母の墓を片付け祖父祖母の墓を片付け今年は暮れる

墓石は三つ永代供養墓に移す子孫の預かる寺へ

曾祖母のあと追うようにその父逝き二人一緒の墓石の下

その店は海産物の問屋だと聞くばかりなり子はそれぞれに

兄は官吏その弟は僧となる兄の末なる我らきょうだい

弟の末なる方に何もかも任せていら墓仕舞いする

隣接の墓と一緒に片付ける祖先の墓に参ることせず

墓参りして墓仕舞いすることの見通し立たぬまま墓仕舞い

コロナ禍の静まり果てよ墓参り心置きなくする日來よ静まるとてもウイルス消えず

口もできるほどに

墓参り心置きなくする日來よ静まるとてもウイルス消えず

口も